

現代の文学= 11

中山義秀集



咲庵
台上の月
厚物咲
テニヤンの末日
少年死刑囚

河出書房新社

現代の文学11 中山義秀集



© 1966

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和41年3月1日 初版印刷
昭和41年3月8日 初版発行

定価 390円

著者 中山義秀
発行者 河出朋久
印刷者 高橋武夫
装幀 原弘(N.D.C.)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロース工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

咲庵	三
台上の月	一七
厚物咲	二六
テニヤンの末日	二九
少年死刑囚	三九
年譜	三三
解説	浅見淵 三二

挿画 三井永一
写真 三木 淳

中山義秀集

咲

庵



ほととぎすいくたび森の木間かな 咲庵

緑蔭の影が深くなった。

五月雨きみだれにいる初夏の候の晡時ぼし前、空ひくくたれこめた雨雲が、広野一帯をうす墨色にとざしている。

右脇に首をかかえこんだ黒具足の若武者が、左手に薙刀なみをうちふりうちふり、躍りあがるようにして彼方から一散にかけてくる。つづいて中年の武者が太太刀をひっさげ、前こごみになってその後を追うてくる。

若武者は河畔の広場に陣どった、大将の幕営の前にかづくと、驚くような大声をひびかせて、羽栗の住人小牧源太道家が、敵の大將道三入道どうさんの首を討取ったと報告した。

後の武者も彼におとらぬ大声をあげ、我こそはまっさきに入道殿ととり組んだが、後からきた源太に功を先んじられたため、しるしに入道殿の鼻をそいで持参したと申し入れた。

幕営の中央、熊皮をしいた胡床に腰をおろしていた、



大将一色左京太夫范可は、膝頭にたてた軍扇を前へのばして、無言に「これへ」という動作をした。

その合図で彼の面前の緑の芝生に、実檢にそなえられた首は、くぼんだ眼窩の奥に目をとじ、頭は白髪で鼻がかけ、皺たるんだ両頬はどっぷりと血にそまって、ふた目と正視できないような無残な相貌である。

これがさきの美濃国太守、齋藤山城守秀竜人道道三のかわりはてた姿だ。梟雄とよばれ主殺しの人非人と罵られた人にあるまじく、みじめに哀れげでさえあった。

幕営の前面左右に膝まずいて、大将の実檢にたちあつた側近将士等は、いずれも声をのみ息の根をころして道三の首を見まもっている。道三は彼等の旧主であつた。

左京太夫范可もおなじく、しばらくの間黙って道三の首を睨みつけていたが、つと胡床から起ちあがると、

「これも、身からでた錆だと思え、老いぼれ」

そう引導をわたすなり、毛皮の沓をもって道三の首をはつしと蹴とばした。首が二転、三転する前に、小牧がすかさずそれを受けとめ、

「殿、これを手前に、賜わらせて下さう」

「おお、勝手にするがよい」

范可は六尺にあまる巨体をゆすって席へもどりしな、沈黙している周囲の将兵の中に、明智光秀の顔を見とめ、

「十兵衛、その方の顔色は、何といたした」

「はっ」

光秀は頭をたれて両手をつき、

「別段のことは、ござりませぬ」

「ぬかせ、まっ青じゃ。臆病げに見ゆるぞ」

衆人の前で臆病といわれるのは、武人の何より恥辱とするところ、光秀が青ざめた顔をあげて、范可の顔を見上げると、憎悪をこめた眼差しで、彼を睨みつけている范可と瞳があつた。

十兵衛光秀は、この時二十九歳、范可は三十歳、わずか一つの違いではあるが、たがいの気質にそりの合わないところがあるようであつた。

范可は独裁者である。それ故に二人の弟を殺し父を殺し、しかもその首を足蹴にした。光秀にはそういう凶太さや、無神経さはない。

道三は彼の一族、明智の城主入道宗寂の娘婿であつた。そのため宗寂は、この戦に出馬していない。かわりに光秀に三十騎ばかりの手兵をさづけ、国守の范可側に参加させた。美濃の守護職にたいする、名目だけの儀礼である。

范可のために馳せさんじた美濃国東西の侍衆は一万八千、明智領一万五千貫、石高になおして七万五千石の城主として、宗寂の派遣した三十騎は少数にすぎる。范可

はそれを憎んだのであろうか。それとも父道三の首を足蹴にする范可の不逞な所業に青ざめた、光秀の二心を咎めたのであつたらうか。

范可は大きな凶体になわす孤独な生れつきで、かつ癪をやんでゐた。彼は道三の子となつてゐるが、じつは土岐家最後の守護頼芸の落胤だとされている。

頼芸から道三にたまわつた愛妾深芳野は、七カ月で范可を生んだ。月足らずで生れたのか、それとも道三に賜わる前すでに頼芸の胤をはらんでゐたものか、そのところは瞭りしないが、王朝以来主君が家臣に、妊婦を下賜するのはべつに珍しいことではなかつた。

道三は五十五歳で隠退して、二十二歳の范可に国をゆずり稲葉の本城をあげわたして、長良川の対岸鷺山の館にうつり、なお国内の政務をみてゐた。范可がまだ未熟な青年であつてみれば、これは当然なことであらう。

しかし当時新九郎高政を名のつてゐた范可が、壮年にちかづき癪を発するようになってから、事情がむずかしくなつてきた。

道三は宗寂の娘小見の方の腹にうまれた実子に、家督をつがせたいと思ふようになつたかも知れないし、高政の方ではまた独裁をねがい、癪病のため廃立されるのを警戒したかも知れない。

とにかく父子の間が円滑をかき、やがて相剋するよう

になったのは、高政側近の老臣が高政の出生の秘密をうち明けて、高政こそ土岐頼芸の血をうけた、まことの美濃の守護と、信じこませたからだと思われる。

高政は重病をよそおい、道三が狩野にでかけた留守中、道三の二子を見舞によびよせて斬殺した。それから母方の姓を名のって一色左京太夫とあらため、父殺し范可の名をとって号とした。

それが昨年の秋の末、父子たがいに国内の兵をあつめ、長良川を中にはさんで対峙すること約半年、兵力三千にたらない道三方はたびたび敗北して、ついに四月二十日、長良河畔で敗死するにいたった。

道三はその日赤の大黒頭巾に白絹のほろをつけ、乗馬もないままかちだちで、本拠とする城田^{きたじ}寺の城へ引上げてゆく途中であった。

後を追いかけた稲葉治左衛門が、道三に組みついてみあっている間に、小牧源太がかけつけてきて背後から道三の両脚を薙ぎはらい、のめったところを幌^{ほろ}の上から馬乗りになって、首をかき落した次第である。

道三はその前日、他処にあずけてある十一歳の末子勘九郎に、遺言状をおくりとどけた。意識すると、次のようなものになる。

ことさら申送るようだが、このたび美濃の国大桑の府

城で、自分の後美濃国の処置は、織田上総介信長の存分にまかせる旨、讓状をわたした。それで信長も明日の戦には、木曾川の下流をおし渡って、尾張から出張してくるであらう。

ところでお前は、かねてから堅く申しつけておいたように、この父がもと修業しておった京の妙覚寺へのぼって、僧籍に入るがよい。一子出家すれば、九族天に生るというではないか。

しかし、このように認めておるうちにも、落つるのは泪ばかり、よしそれも夢、そちが父斎藤山城、法華の妙体^{みょうたい}をうけ、生老病死の苦をば、修羅道になげうって仏果をうる。嬉しいぞや、明日一戦におよべば、おそらく首足ところを異にして、成仏をとげることは疑いない。まことにこそ

捨てだに この世のほかはなきものを
いづくか終^{つひ}の住みかなりけん

弘治二年 四月十九日

斎藤山城入道道三

児参る

戦国の武将や戦士の多くが、世の無常をかんじていたように、梟雄とよばれた道三にも、こうした一面がある。彼は唯一人のこされた我が子を、戦の修羅道にさら

すのを忍びえなかった。そのためわざと美濃一國の支配は信長にまかせたから、未練をのこすなという意味で、遺言状の冒頭にことわっておいたのであろう。

「嬉しい哉　すでに明日一戦におよぶ、五臓不具の成仏　疑あるべからず」

とは戦国武将の心意気といえは心意気、負け惜しみといえは負け惜しみと云われないこともない。

六十三年の彼の生涯は、野心をもって始まり、この世のほかに安住をもため感慨の辞世で終った。

道三は御所北面の武士、松波左近將監藤原基宗の妾腹の子とつたえられている。末子の勘九郎とおなじ年の十一歳で、日蓮宗の大伽藍妙覚寺に入って法蓮とよばれ、成人後還俗して山崎八幡宮の油問屋、奈良屋又兵衛の娘婿となり、あらたに問屋山崎屋を経営するようになった。えごまの種子から燈油をしぼりだして、これまでの松火にかわらせたのは山崎八幡宮である。そのため燈油の独占販売権をもち、座をつくって諸國にひろく売りさばっていた。

奈良屋や山崎屋はこの座にぞくする商人で、山崎屋は美濃國に市場をもち、独占販売と高利の金貸しで巨富をなした。折柄美濃の守護土岐家や守護代の長井家は、内訌にあけくれて財力が疲弊し、当時庄五郎といった道三の金融をあおぐようになる。

道三はそうした関係から家中に入りこんで、ついに土岐や長井にかわり美濃一國をのつとてしまったわけだ。金融業者が貸付金の抵当に、会社や工場をのつとるのと同じようなものだったかもしれないが、道三にそれだけの器量と実力があつたのはもとよりで、その半面他人のものを横奪したというそりはまぬかれまい。

その弱点を范可につかれて、はかない最期をとげたわけであるが、内実はともかく表面はどこまでも父子の争であつたところに、国内の悲劇があつた。道三父子の権力の争奪であつたばかりでなく、家臣の間でも父子兄弟、親戚、朋友、敵味方にわかれて殺戮しあい、千余の死者をだしたからである。

感じやすい光秀は、これによって大きな衝撃をうけた。後年海内一の撃手とうたわれた光秀が、最初に銃砲の手ほどきをうけたのは、道三からであつた。

道三は鉄砲ばかりでなく、弓馬槍劍から遊芸にも通じていた。

道三が土岐の家中に入って国守となるまで、わずか十数年にすぎなかったかわり、雌伏の時がながかつた。その間に道三は孜孜として他日にそなえ、百般の修業にとめたに相違ない。そしてそのすべてを、彼の出世のために役立てた。文学から禅学の素養まで浅くなかつたことは、今に残されてある道三自筆の遺言状からでも推察

されよう。

五躰不具のいたましい成仏をとげたにしろ、一生の志をつらぬいた点では、まず遺憾のない生涯だったといつてよい。彼が明日の死を覚悟した、いさぎよい最期からしても、なしうる事をなしとげた者の未練のない心境がうかがわれる。この世のほかに終の棲み家を求めるなどとは、彼にかぎらず贅沢な願いごとだ。

范可は道三をほろぼした後、彼の遺領をとりあげて、名実ともに美濃の国守となり、またも改名して正式に斎藤美濃守義竜と名のようになった。

そしてこの年の九月、明智城へおしよせ、二日後城を攻めおとして、明智領七万五千石はもとより、東美濃一帯を確実に手中のものにした。道三が明智宗寂の娘をめとったのは、東美濃衆を味方につけるためであり、義竜が城をうばって宗寂一族をほろぼしたのは、はっきりとわが版図に加えるためであった。

土岐の支族明智一家は、二百数十年間土着したこの地に跡をたつことになり、妻子をつれて城をのがれてた明智光秀が、わずかにその名跡をになうことになった。

彼は妻子を京の寺にあずけて武者修行にいでたち、越前の朝倉義景のもとに身をよせるまで六年間、北はみちのく南は九州へとさすらいの旅をつづける。

しかし、その事跡ははっきりしていない。信長や秀

吉のように、彼の伝記をつたえる忠実な右筆はいなかったし、彼自身も何等書きのこすところなかったようである。あっても叛臣であることを忌まれて、おおかたは空しく遺棄されてしまったのかもしれない。

光秀の青年時代で、比較的是っきりしているのは、斎藤父子の争に光秀が子の義竜側について、参加したということぐらいである。

范可の義竜が父の首を足げにするのを見て、光秀が蒼白になったのは、はたしてどのような感情だったからであらうか。また産衣うぶぎの頃から育てあげて家督をゆづった上、二人の子供を暗殺されわが身まで殺される道三の生涯、さらにその宿命を甘受して末子に僧になれと勧める武將の心情を、いかにくみとったのであったか。

もとより光秀は当時、道三の遺言状を知るはずはなかったが、たとえ知っていたにしても、鼻をそがれた道三のみじめな白髪首をみれば、おそらく彼の殊勝な心情に同感はしなかったであらう。

光秀は道三の最後の姿に立会い、明智落城という打撃をうけて、心機一転した。彼が京の寺に妻子をあずけ、遍歴の旅にのぼったのも、心中ひそかに期するところあったからに違いない。それ故六年の漂泊と刻苦に堪えたのであらうし、又堪えなければならぬほどに不遇でもあった。

遍歴六年後の永祿五年、明智十兵衛は越前の一乗谷、朝倉の城下にたどりついた。

北はみちのく盛岡、南は九州薩摩、東山、東海、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道、六十余州をほぼ限なくめぐって、各地戦国武將の弓箭の強弱をうかがったとある。

時に十兵衛は男盛りの三十五歳、面長で中高の容貌は、六年間の漂泊にきびしく洗いつくされて、頬骨は高くつきだし、額は広くぬけあがって、両眼に異様な暗光をたたえ、齋藤義竜に「臆病者」とどなられた、往時の弱々しい面影は一変してしまっている。

何処でも禄にありつけなかった、この不遇な牢人武者が、朝倉義景に五百貫の知行でかえられたのは、同国坂井郡長崎村称念寺の長老、園阿上人の推挙によるものとされている。

今丸岡町の一部となっている長崎村の往生院称念寺は、新田義貞の廟墓があるので名高い。遊行一遍上人のひらいた時宗の念仏道場で、しばしば武將の宿泊所にあてられる巨刹であった。

太平記、義貞自害の章に、この称念寺について、次のような記載がある。

サテハ義貞ノ頸相違ナカリケリトテ、尸骸ヲ與ニ乗セ時衆（時宗の僧）八人ニ、カカセテ、葬礼ノ為ニ往生院へ送ラレ、頸ヲバ朱ノ唐櫃ニ入レ、氏家ノ中務ヲ副エテ、潜ニ京へ上セラレケリ。

長い遍歴のはて、十兵衛は妻子をつれ、この名刹の厄介になつていた。和歌、連歌、故実、禪学などに通じていた彼は、庫裡の一隅を借りうけ、寺の衆徒や村の児童に、文字、手習をさづけ、ようやく一家の露命を糊していたようである。

彼が越前へながれてきたのは、土岐の朝倉の縁故をたどつてのことだ。齋藤道三に国をおわれた美濃の守護土岐の宗族は、しばしば朝倉の領下へおちのびて、その庇護をこうむっている。

土岐の支族である明智十兵衛にしても、そのはかないつながりを、頼みにしてのことに違いない。

もっとも朝倉家はこの当時、最も繁栄をほこつた頃で、その支配する所領は百万石余にもおよび、北は加賀の手取川以南、南方は若狭の敦賀、小浜、近江の姉川以西を、その勢力範囲としていた。

京の公卿貴族はたびたび下向してくるし、朝倉義景も年々朝廷や幕府に献金して、さかんに都の風をとり入れ、一乗谷は小京都とよばれていたほどであった。

十兵衛は不遇だったにしても、貧窮と艱難にたえて、

たやすく辺土の諸侯に奉公をもとめなかったのは、自分の素養についての自信と、将来にたいする野心を、胸中にひそめていたからだろうと想われる。

時は応仁以来うちつづく、戦国の世だ、頼朝や北条、足利の手によって配置された、全国の守護大名は、つぎつぎと没落してゆき、彼等にかわって無名の実力者が、ぞくぞくと地下人^{ヒゲ}のうちから頭をもちあげてくる。

小田原の北条早雲、美濃の斎藤道三、大和の松永正、いずれも漂泊の浪人から身をおこして、一国一城の主となったではないか。

四国の長曾我部、中国の毛利、尾張の織田弾正忠にしても、実力をもって陪臣の中から崛起してきた。まして名族土岐の流をくむ十兵衛光秀が、断絶した明智家の再興を志してならないはずはあるまい。

越前守護の義景は、朝倉家十一代目、初祖広景の越前入国以来二百二十年、いまが最盛期だ。

彼は武よりも、文を好んでいる。しかし彼が五百貫の高知行で十兵衛をかかえたのは、十兵衛の文学をかったのではなく、その頃珍重されていた、十兵衛の拔群の銃技をかったのだ。

十兵衛が一乗谷の安養寺下西の馬場で、二十五間の距離に一尺四方の的をたてて射撃をころもいた時、二時間 にわたり百発の弾丸をはなって、そのうち六十八発が黒

星に命中し、残りの三十二発も的はずさなかった。当時の火縄銃としては、まず神技にちかい的中率であつたろう。

その腕前がみとめられて、十兵衛は銃手百人の頭となり、加賀の一向一揆二千人がこの年の秋、加州能美郡今江潟東南の駅路、御幸塚におしよせた際、砦ぎわに一揆をひきよせ、櫓の上から銃をつるべ撃ちして、やにわに三百余人をたおし偉功をたてた。

これで十兵衛は実戦の上でも、すぐれた戦術家であることが分つたが、その後国内は平和で一揆の来襲もなく、戦功をあらわす機会がなかった。

こうなると折角貯えた十兵衛の実力も、いわば宝の持ちぐさである。彼が朝倉家に仕えたことを知って、義竜にほろぼされた明智の一門が、彼の許に身をよせてきた。

三宅(明智)弥兵次光春(秀満)、明智次郎右衛門光忠、藤田伝五郎、溝尾庄兵衛、奥田宮内など、後に十兵衛光秀の手足となって、彼の叛逆にくみした腹心の人々だ。

いずれも十兵衛を一門の棟梁として、明智家の再興を宿願にしている。明智氏は土岐の支流国内三十余家のうちでも、一番重んじられた家柄で、東美濃から西美濃へかけて、一族が繁衍^{はんえん}している。

明智家をほろぼした斎藤義竜は、昨年の五月十一日三

十五歳で急死した。後を嗣いだ竜興はまだ十五歳の少年、その機に乗じて美濃をのりとうろと、織田信長は躍起となっている。

斎藤道三の遺言状にもあったように、美濃国は娘婿信長の存分にまかす、という譲り状をもらっているのので、その時以来信長は美濃国主の後継者をもって任じているわけだ。

道三戦死の時、信長は舅との約束にしたがって、木曾の対岸大浦口まで出馬したが、時すでにこそく道三討死ときいて、

「今にみろ、あの癪殿（義竜）の頸をきって、舅殿にたむけてやる」

と豪語したそうだが、彼はその時分まだ尾張半国をようやく支配するようになったばかりの上総介、到底美濃六十万石の太守、義竜には齒がたたなかつた。

しかしその後今川義元の頸をうち斬ってからは日の出の勢い、遠近諸武將の注目のまよになつてゐる。日に月に西美濃、東美濃と手をのばして、東西からしつこく美濃の攻略をはかつていた。

そうした本国の形勢を耳にするにつけ、光秀以下の明智一門にとっては、なにかと氣のもめる話だ。本来ならば土岐の杜稷（しよじく）をうけつぐ者は、明智一門のはずなので、無関心でいられるわけがない。

ただ十兵衛には、事をおこすだけの兵力がなかった。また美濃の諸豪族は、土岐の嫡流を名のる斎藤家を支持して、他国者の信長に国を横領されまいと結束しているため、その隙に乗ずることもならぬ。

守護の土岐、その目代斎藤は、ともに数百年の歴史をほこっている。それぞれ源頼光、藤原利仁の流をくむ家柄で、斎藤家は土岐よりも、古くこの国に土着したが、土岐家が隆盛になつたため、それに隸属するにいたつたもの、長い年月の間に両家とも庶流がふえ、美濃国の沃地や要所をおおかた占拠している。その分流の多いことでは、明智一門とは較べにならない。

織田は朝倉とおなじく、管領斯波家の三年寄の出だ。

織田信長はその年寄のさらに分家筋にあたる者で、家柄からいえば陪臣のまた陪臣、土岐、斎藤両家には、遠くおよばない。その信長が婿引出物とされた、道三の譲り状をふりまわしても、八千騎とうたわれる美濃侍を動かすことはできなかった。

十兵衛や弥兵次達が脾肉をかこっている間に、三年がすぎさつた。朝倉の城下一乗谷は、天地がせまい。

南北につづく谷の長さは三十余町、東西にせまる谷あいの幅は、広いところで十町たらず、谷を出て東方を眺

めれば、日本海にいたるまで十数里の間、南北にひろびろと田野がひらけている。

いかに要害のためとはいいい、わざわざ袋の底にもぐりこむために、なぜこんな狭い谷間にひっこんでいるのかと、疑りたくなるくらいだ。

しかも谷間の南端と北端に、上城戸、下城戸の両口を設け、土塁や木柵で入口を遮断し、それ等の外側に町家をゆるしている。

義景の居館は城山の東麓、一町四方の地域をしめ、これも土塁や築地でかこまれている。

館の両隣には別宅や一族、老臣の屋敷、家臣の家々がならんでいる。朝倉家は家法として大方の侍をみな城下にあつめ、彼等が所領の知行地には、代官や下役人を派遣して、年貢の徴集や行政にあたらせていた。

朝倉家の家風は、中興の祖英林敏景の遺訓十七カ条に見られるように、すこぶる手堅い。武田信玄がもって手本としたくらいであるから、その堅実さが察しられようというものだ。

一乗谷の狭隘な谷間に山城を築き、朝倉累代の根拠地と定めたのも、この敏景である。

初代広景が越前、尾張の守護足利（斯波）高経の目代として、義貞征伐のため但馬の国出石郡朝倉から越前にうつり住んだのは、南北朝時代のはじまる延元の頃、そ

の居住地は坂井郡鷺村の黒丸であった。長崎村称念寺の西二里ばかり、九頭竜の大河を前にし三国の港にも遠くはなく、沃野につつまれた洞開の天地だ。

朝倉氏はここに七代すんだが、文明三年將軍義政から守護職を拝命して、陪臣より大名となった敏景は、黒丸の地をひき払って一乗谷にうつった。黒丸は加賀の国境よりなので、加賀門徒の襲撃をさけてのことであろう。

それから四代百年、鉄砲の渡来で戦術が一変したため、山城はもう時代おくれになってしまった。新興の武將は信長をはじめ、誰も山城などを頼みにしていない。銃槍隊を先頭に集団をもつて、広野に敵と相對峙するものが、戦鬪の常道になっている。

義景もそれを知らないわけではあるまいが、国内が一応平和なので、強いて住みなれた谷間をでる必要がなかった。それにまだ三十歳の若きなので、都下りの公卿や美女を相手に、日夜風流韻事の遊宴にふけっているほうが面白い。谷間に隠れておれば、血なまぐさい戦乱の世の響も、それほど強くは感じられなかった。いわば此処は桃源の別天地、平和を楽しむ義景にとっては、血みどろになって寸尺の地を争っている諸武將輩なぞ、糞くらえといったところであろう。

こういう義景と反対に、十兵衛は小天地の平和と無聊に倦いていた。勤勉な彼はその間も兵法や諸学の研鑽を